

内気な男の子が気になる幼馴染みと  
Hできる方法をTS的に考えてみた



## ○scene 0：ユメノナカ

——夢。

それは、現実ではない世界。あり得ない世界。人の思いが滲んでいたり、はたまた欲望が混ざっていたり。

逆に言えば、そんな空間だからこそ許されることもあるし、我欲のままに突っ走れる唯一のワールドだとも言える。

——そう、僕は思う。

だからこれは、夢なんだ。

「——キモチイイ？」

身体がふわふわと浮いている。天を目指して昇っている感じでも、はたまた重力に引かれて落ちていく感じでもない。体験などしたことがないから、比喻表現としては正しくないけど、雲の上に浮かんでいるとすればこんな感じなのかもしれない。

「——キミのって、チョット変わった味がするよ？」

そして、どこからか女の人の声が届いてくる。僕の頭の中に、直接響いてくる。

甘いようで、酸っぱいようで、優しく、でもどこか悪戯っぽくて。喜怒哀楽の喜と楽だけを抽出したような囁きが、何故か僕を魅了する。

「ここは、夢の中……なんだよね」

「ソウ、ユメノナカ。キミが普段素直になれない、表に出せない欲がココにアルノ」

姿が見えず、僕の脳に直接語りかけてくるその人とは、どうやら会話を交わすことができるらしい。

「くすくすっ。もっかい聞こうカナ？ ねえ、イツキ。キモチイイ？」

イツキ。それは紛れもなく、僕につけられたファーストネーム。

「……僕の名前、知ってるの？」

「モチロン。美味しそうな子のコトは、何でも調べられるしネ。そうしたほうが、モット味が深くなるんだヨ」

「美味しいって、僕を食べちゃうの？」

「くすくすっ、どうしよっかナ？ 果汁100パーセント、そのままじゅるじゅる啜ればテイステイグッドなのは間違いないんだケドー」

まっしろ、まっしろ、雲のよう。

あめだま、わたあめ、りんごあめ。

ふわふわと浮く両手、そして両足に、ぴりりという刺激。何か、いや誰かに、肌を直接触られているような感じがする。

「んふふふっ、やっぱりステキ」

さわさわ、さわさわ。つつくくくっ、こちよこちよこちよ。

それは、鳥の羽根のような触られ心地。

手足の先から始まった痺れは、いつの間にか全身を覆っていた。くすぐられる夢の中では、着ている服もお構いなしなんだろうか。

「ピンカンなんだ、イツキ。オトコノコなのに、どうしてカナ？」

耳元で囁く、女の人の声。それが何故か『甘い』と感じる。

そして、緩やかな痺れは、僕の身体の中で一番特徴のある場所に迫ってきて……。

「……そこは、だめだよ」

理性とか、そういう立派なものじゃない。

ただ、そのキモチイイという感じが、あまりにも文字通りすぎてほんの少し怖かった。

だから僕は、彼女に反抗してしまったんだと思う。

「――ダメ？ ソコハ、気持ちいいのニ？」

「……だって、恥ずかしいもの」

男性器。おち○ちん。そこをひけらかすことに、僕は羞恥心を感じてしまっていた。

「フーン、恥ずかしいトダメなんだ。キミ、リンゴは皮剥いて食べるほうなのカナ。アトミカンは房ごと食べないタイプ？」

「りんごとか、そういうの関係ないよ。とにかくそこはダメ」

「ドウシテ？」

「それは……その、僕、人に見せたことなんてないし、使ったこともないもん」

夢の中なのに、おかしいかもしれない。

もちろん、直に肌をまさぐられているくらいだから、隠し事なんてできない。そこを触って欲しいと願っている僕の本心は、多分女の人に筒抜けだ。

「シャセーの味、知ってるよネ」  
首を、縦に振る。

「ビタースイートなスペルマ、飛ばしたいって思ってるよネ？」  
もう一度、躊躇いながらも首を縦に振る……けど。

「……でも、恥ずかしいんだ」

僕はもう一度、無邪気な女の人の誘いを、やんわりと断った。



「……っ？」

薄布のカーテンから、朝日が射し込む。遠くに聞こえる路線バスの音が、既に朝であることを知らせてくれる。

けど、イツキと呼ばれたこの僕は、ベッドの中から出られないでいた。原因は、股間のモノだった。未だに成熟してなくて、時と場合によって皮を被ったり被らなかつたりを繰り返すそれは、明らかに尋常じゃない熱を帯びつつ天井に向かってどーんと反り上がっていた。

「これ……朝勃ち、ってやつだよね……？」

ただ、生理現象とは違う何かがある、海綿体に血液を送り続けている。

例の夢が、こうさせているに違いない。ここのところ毎日見る、あのむず痒い感覚がびっしり詰まった夢が、だ。

オレンジだの何だのと、いつも何かしらの果物に例えられて、女の人に誘惑される。優しく身体を撫でられて、脳みその皺まで蕩けそうになったところで食べられそうになる。

そう、あの女の人だ。いかにも女性って体つきで、おっぱいが大きくて、腰もすわりとしていて、くびれが美しく、お尻もきゅって締まっ  
ていて……ビキニのような面積の小さい服で、僕を悪戯っぽい目で見て  
いる女の人。

悩ましい夢を見るのは、僕が欲求不満だからなんだろうか。

けど、だとしたら僕がそこで躊躇する理由はないし、仮想世界の中で  
くらい欲望に溺れてもいいと思うけど……。

「……うわ、やば……！」

その瞬間、咄嗟にお尻の穴を窄めて頑張ってみたけど、無理だった。

「う……あ……ああ……っ」

擬音を付けるなら、びゅる、びゅく、ぶびゅるるる、といったところ。  
ろ。

寝間着の中、パンツの下で、欲にまみれたおち○ちんが勝手に爆発し、  
無塩バターみたいなクリーム色の濁った液体を撒き散らかしていく。

「…：うう…：また、やっちゃったよ…：」

これも、夢精の内に入るんだろうか。だとすれば、まだ説明はつくんだだけ。

想像だけで勝手に射精しました、なんて言ったら、男としてあまりにもしまりが無い。

「後始末、大変なんだけどなあ…：」

どろどろになったパンツは、家族共通の洗濯かごに入れる訳にもいかない。

今朝はまた、すべきことが増えてしまった。

「なんで勝手に爆発しちゃうんだろうな、こいつ。なのに皮被ったままだったりするし。今だってそうだ。持ち主の僕が堪えろって言ったんだから、最後まで我慢するのが筋ってものだよね」

独りごちながら、僕はウェットティッシュに手を伸ばし、望みもしない快樂の後片付けをした。

「――ソウ？ 出しちゃダメ、って思うんだ、イツキって」

「…：え？」

僕以外、誰もいないはずの部屋。

けど、どこからか甘く優しい、女の人の声。

「――キミの今のカラダじゃ、ノゾんでるモノは得られないのカモネ。

面白そうだから、ミックスジュースみたいに混ぜ混ぜしちゃおっカナ？」



というより、イレギュラーな情報の量が多すぎて頭の中にしまいきれず、口からこぼれてきたと言った方がいいのかもしれない。

ただ、化粧台の鏡にも、自分の背丈よりちよつと高い姿見にも、映っているのは一希の姿だ。

……自分が指を動かすと、一希が鏡の中で指の感触を確かめる。鏡の中で一希がほつぺたを触ると、ふにゅんと柔らかい触り心地が人差し指に跳ね返ってくる。

僕が、一希の中にいる。あるいは、僕が一希の身体を借りている。そんな超常現象でしか、今のこの状態を表現できない。

——と、その時。可愛らしい電子音が、机の上から聞こえてきた。どうやら、携帯の着信音らしい。多分、一希の。

着信のメロディが一巡するくらいの間、出たほうがいいのか、しらばつくれたほうがいいのか迷ってみた。けど、フリップを開けると、そこに僕の家の電話番号がディスプレイされていたから、思いきって受話ボタンを押してみた。

『あ、やつと出た』

受話器の向こうから、僕の声。

「も、もしもし？ えつと、誰……？」

『誰って、それこっちの台詞。っていうかその身体に入ってんの、樹だよね』

「え？ えっ？ なにそれ、どうして僕のこと……」

『あ、その声でボクとか言うな、鳥肌立つから。とりあえず、そこから動かないで。母さんが部屋に入ろうとしたら仮病でも使って誤魔化して』

非日常に出くわした時の最善手を、受話器の向こうの僕が指示してくる。

ただ、このノリと押しの強さには、やっぱり記憶があった。

「……っていうか、僕が話してるのって、やっぱり一希……だよね」

『皆まで言うな。まあいいや、すぐそっち行くからね。くれぐれも部屋から出ないように。いい？』

ぶつつ、と乱暴に、電話の切れる音がする。

言いたいことをほぼ一方的に言われ、僕はぽかんとするしかなかった。



それから、約三十分後。同じ町内に住む『樹』が何年振りかに周防家を訪れ、一人娘の部屋に上がり込んでいた。

対して、僕ははじめで、客観的に僕の姿を見ることになっていた。  
「…で、この有様ってワケかぁ」

何故か、開口一番悪態をつかれていたけど。

「な、なんだよ。そんなに睨むなよ」

凄んでみたけど、全然迫力のない声が、一希の…いや、僕の口から漏れる。

こんなにくろたえている僕とは対照的に、目の前の樹はある意味いつも通り。男物の制服もきちんと着てるし、寝癖のつきやすい直線的な髪も、今日は綺麗にさらりと下へ流れている。

対して僕が操っている『一希』のほうは、まだパジャマ姿のまま、身支度なんてこれっぽっちもできていない状況だった。

「はぁ…なんだか、なよっつい自分って見てるだけで違和感。樹に自分の身体貸し出してるみたいでやっぱ違和感。んで、やっぱちよつと悔しい」

「く、悔しいって、何がさ」

「そーやってベッドにちよこんって座って、こっち見てさ。隣にぬいぐるみがあつて、しかもクリーム色のパジャマ着崩した感じで。いつも私が鏡越しに見てる私より、女の子っぽいんだもん」

「…女の子っぽい？ 僕が？」

いや、今の僕は、確かに性別は何だと聞かれたら、外見上は女の子なんだろうけど。

でも中にいるのは僕で、今まで男だった僕で、だから女の子の身体なんて知らなくて、戸惑ってばかりで…。

「はぁ…現実って目の前にあると残酷なんだよね。ま、こればっかりはしょうがないって、そう思うしかないかぁ」

目の前の僕が、オーバーアクション気味にぼりぼりと頭を掻く。

対してこっちは、何をしていいかもわからない状態が続いているんだけど…。

「でさ。樹も…だと思っただけど。変な夢、見たよね？」

ただ、幸か不幸か、樹の口を借りて、一希が僕にそんなことを問いかけてきた。

『夢』。どうやらそれは、二人の身体に、そして就寝中の脳みその中にあった、共通の出来事らしい。

「夢…って、あの変な女の人が出てきた…みたいなの、一希も見たの？」



「…：やっぱりかあ。こっちも記憶はおぼろげなんだけどさ。あ、夢だからそれがフツ―なんだろうけど、けど昨日、またその夢見て、とびつきりへんな気分になって、その…：最後に『イツキとイツキを結んだら』みたいなコト、言ってたから」

「！　そ、それ、僕と同じだ。やっぱり同じ夢なんだ。じゃあ一希も、えっちなことを夢の中で…：」

「コラ」

「あいたっ！」

こつんと、頭に軽い衝撃。どうやら僕は、目の前の樹にツツコミの要領ではたかれたらしい。

自分に殴られるというのも稀有な体験だと思うし、あまり気持ちのいいものでもないけど、それは今どうこう言うべきところじゃない。

多分、今のは僕が悪い。僕の中にいる一希も一応は女の子なわけだから、面と向かって『えっちした？』はあまりにもストレート過ぎる。

自分からオナニーだの何だの言うけど、他人からそれを指摘されるとなる話は違う。

…：目の前にいるのは、男の子だけどね。それも、いつもより背筋がびしっと伸びた、小柄ながらもちよつと芯の強そうな男の子。

「うー…：話進めてくと、墓穴掘りそうでヤだなあ」

そんな彼は、今度は恥じらいを見せたりもする。『樹』が顔を赤くするさまを客観的に見るなんて、本当に違和感以外の何物でも無いけど。

「ぼ、僕だって、その度に一希に殴られるの、ヤだよ」

「うっさい。ちよつとは言い方考えるくらいしなさいっての」

ただ、いつまでもここでまごついている訳にもいかない。

とりあえず、疑問点の一つは解消しておこう。

「じゃあ、答え合わせで一つだけ、聞いてもいいかな。夢に出てきた、女の人の名前」

「そ、そうだね。それなら…：」

日本人のものではない名前は、特徴的だから。

ここでもし、一希と僕が別の名前を出したら、この超常現象は完全に常識の範囲を超えることになる。

「サキュバスの」

「…：『フェデリカ』？」

…：けど、そうならない。

二人の口からは、日常的に使われることのない単語が、申し合わせたかのようにぽんと出てきた。

それは、『彼女』が確実に存在していたことを意味する。

そして、十分にファンタジックだけど、僕たちが『こうなった』ことの説明も。

「あは…：ははは、やっぱこれ、夢なのかな」

スラックスを履いた男の子が、またもオーバーアクション気味に頭を抱える。

身振り手振りがいちいち大きいのは、一希の特徴だ。

「…：ねえ、樹。サキュバスって、私よく知らないんだけど」

「うーん…：僕も、ロールプレイングゲームの設定くらいしか知らないよ。日本語に訳すと『夢魔』とか『淫魔』って言うモンスターで、男性の精液を吸うことを生き甲斐とする化け物のこと」

「…：男の人の…：？」

「彼女たちにとって、それが食事だから。男の人の夢の中に入り込んで、淫らな夢を見せて、性的に男性を襲うっていうのが彼女のはずだよ。昔は男性が不倫やレイプの言い逃れとして『淫魔のせいだ』って使ったらしいけどね」

一応、樹としての僕の記憶は、そんなところだ。

国語辞典のえっちな単語を見てドキドキした、そんな記憶の延長線上で、こういうこともネットやら本やらで調べたから、ほんの少しはフェデリカのがわかる。

ただ、気付くと僕に投げかけられている視線が、じつとりとしたものに変わっていた。

「…：樹、えっちだからよく知ってるね」

「っ？ 僕は一希から聞かれたから、答えただけだからね」

「わーってるけどさあ…：なーんか、樹のムツリスケベっぷりが、夢の中のあの女を呼んだのかなって思えてきちゃった」

「それは違う…：と思う」

「あははは、否定するトコだよ、そこは」

割と、自信がない。僕の内向的なエロさ加減は、僕が一番よく知っているから。

ただ、一つだけわからないことがある。どうしてサキュバスの彼女が、女の子の一希にちよっかいを出したのか、という箇所だ。

「ま、いいや。コレがそう簡単に元通りにならないってわかったし」

などと考えを巡らせていると、一希がぱんと手を叩いて場を制してきた。

「とりあえず、支度しなきゃ、かな」

「へ？ 何の？」

「何のって…ガッコ行くに決まってるっしょ」

「え？ えええええっ？」

素っ頓狂な声が、僕の喉から発せられる。

…自分で出しておいて、ちよつとだけ可愛いって思った。えくくく？  
だなんて、男が声を出したらうざったいだけなのに、女の子が言うところなるんだ、って。

いや、待とう。問題はそこじゃない。

「ち、ちちちちよつと待って！ 無理無理無理、絶対ムリだって！」

「無理も何も、二人して無断欠席するほうがムリ。そっちのほうが怪しまれるんだから」

「けど僕、今一希になってるんだよ？ ほら、女の子って出掛けるのにすぐく時間掛けて準備するんでしょ？ 着替え方一つとっても、今の僕は何していいかわかんないよ」

僕がパニックになっている理由は、それだった。

スカートなんて恥ずかしい。リボンタイだって、つけ慣れている訳がない。いくら自分が男じゃないうって暗示をかけても、あんな制服をいきなり着るのは恥ずかしすぎる。

ただ、そんな僕の肩を、目の前の男の子ががっしりと掴んで…。

「大丈夫。わからないことは、僕が教えてあげるから」

「え…？ あ…？」

…：…：…：そう、言い放った。きらきらした純粋な目で、小さな子に言い聞かせるように。

何故、なんだろう。今一瞬、腰がぶるぶるって震えた。背筋にじーんって来た。

『女の子のことを教えてもらえる』。そんなことを、僕が喜んでいる…

…：…：…：ん？

「って…：…一希、僕、だなんて」

「あはは、このカッコしてるなら、そう言った方が無難だよね」

「適応力ありすぎだよ…：…ちよつとはためらおうよ」

「言おうと決めたときはどきどきしたけど、一度口にするとフツーに聞けるもんだよ？」

そんなもの、なんだろうか。

でもそうしたら、今の僕も、普段の一希と同じようにしなきゃいけない。く。

「ほら、今度はそっちの番。さ、自分のこと何て言う？」

僕の……いや、樹の視線。優しく、そしてどこか強く、諭すような目つき。

僕が、今まで通りの僕だったら……多分、一希をこんな目で見ることはないと思う。

どうしてか、頭の中が真っ白になっていく。ぐちゃぐちゃになっていた思考が、強固な意志を持つ視線に導かれて、恥じらいや躊躇といった感情を抑え込んでいく。

「……あ、あの……えっと、『わたし』……？」

「うん、そうそう。よくできました」

「あ……」

ぼんぼんと、頭を撫でられる。

樹がほんの少しかがんで、僕の……うん、ベッドに座っている『わたし』の髪をくしゃりと撫で上げる。

……だめだ、嬉しい。この頃一希には、ムツツリだの意気地無しだのとなじられるばかりで、褒められたことなんてなかったから。

多分、だからだと思う。ほんわりと頬が熱くなったのは。

「じゃ、その勢いで着替えよつか。ほら、パジャマ脱いで」

「……え？　ち、ちよつと、あれれ？」

ただ、頭を撫でていたはずの手が、今度は『わたし』のパジャマにかか

る。「い、一希……じゃなくて、樹って言えばいいのかな？　なんでわたしの服、脱がそうしてるの？」

「発音なんてどっちもイツキなんだから、細かいコト気にしない。ってゆーか着替えるんだからまず脱がないと、でしょ」

「お、男だっけいきなりひん剥かれそうになったら、絶対抵抗するって！」  
どすんばたんと、ベッドの上で揉み合いになる二人。

今度は別の意味で、ほっぺたが熱くなってきた。

だって、この歳になって人に着替えを手伝ってもらうなんて、羞恥プレイにも程がある。

「あーもー、そんなトコで恥ずかしがるな！　ホントに女の子みたいに思えてくるから！」

「い、いいよ。着替えくらい一人でできるし」

「じゃあ聞けど、スカート履ける？　ブラ付けられる？　そーゆーの、テキパキできないっしょ？」

「……へ？　ブラ？」

冷静になって、考える。

「そうだ。女の子のパンツに、女の子のブラ。下着一つとっても、『わたし』の中の僕にとっては初体験のことばかりなんだ。」

「ふっふっふ、わかったようだね、一希。ここは一つ大人しく、僕のレクチャーを受けようね〜」

「ひ、ひいっ！ どうしてそんなに嬉しそうなのさ！」

「なんでだろうね？ けど、可愛い女の子は苛めたくなるって言うじゃん」

「い、今さり気にも自分のこと可愛いって言っ…ふにやあああ！」

「いとも簡単に、僕は押し倒されてしまう。」

「…『僕』って、こんなに力が強かったっけ。それとも、今の『僕』が非力なの？」

「とりあえず、パジャマ脱いで、パンツも履き替えなきゃだね」

「え？ えっ？ 下着も脱ぐの？」

「当然。そんなだっさいフルバックのなんて、ガッコに着ていけるワケないっしょ」

その精神は、よくわからない。別に自分から見せる訳でもないし、スカートを履いているから普通に見える訳もないのに、下着の柄とか大きさとか気にするなんて。

「わからない、って顔してるね。ま、仕方ないとは思うけど、女の子の世界って色々あるんだよ。体育の授業の着替えとか、こっちがガードしても悪戯で触ってくる子いるし」

「ど、同性だよ。なの？」

「だから、手加減ないんだよ。そんな時にだっさださのパンツ履いてるのが発覚したら、一週間はそのネタで弄られるって」

「…女の子は、怖い。可愛いけど、ちょっと怖い。」

「ということで、下着はそっちの棚。ブラウスはハンガーに掛けてあるから、それ着るように。ボタンの掛け方逆だから、戸惑うかもしれないけどね」

「う、うん…」

ただ、今の『樹』は、そんな怖さはなかった。ひん剥かれた後はてきぱきと、着替えを用意してくれている。

当然と言えば、当然か。自分を襲っても、何の特にもならないし。

「……」

そして、僕のほうはというと。

パジャマを脱いで、下着が入っているという引き出しを開けたところで、固まってしまった。

「なに？ ほら、手を動かさないと遅刻するよ？」

「……やっぱり、無理だよ。僕、こんなの見たことないもん」  
「僕、じゃなくて」

「わ、わたしでも何でもいいから。とにかくこんな下着……」  
レモン色とか、真っ白のとか、ピンクのとか、薄い空色のしましまとか。

女の子の下着はカラフルで、おしゃれで、可愛くて。

……そして何より、使い方がわからない。当然、『僕』は着たことも脱がしたこともないんだから。

「あ、そっか。そこも教えなきゃいけないか。じゃ、鏡の方向いて」

「え？ ひ、ひんっ！」

ぐるりと回れ右。半裸の女の子の姿が、姿見に映し出される。

パンツ一枚で、恥ずかしそうに視線を泳がせて、ただひたすら戸惑っている女の子。

「じゃ、まずはブラからだよ」

そんな子に、女物の下着を手にした男の子が、無造作に馴れ馴れしく近づいてくる。この光景自体が思いつきり常軌を逸しているし、だからこそ新しい戸惑いの種になる。

……けど、そんなものは序の口だったと、『僕』は次の瞬間思い知らされた。

それは、ぱちん、と背中が音がした直後の話で。

「ひゃうっ！」

控えめなサイズの膨らみを、ブラの中で外側から鷲掴みにされる。

瞬間、得も言われぬ感覚が身体中を駆け巡った。

——他人に、男の人に、おっぱいを揉まれた。

その感覚を、素直に表すなら……『気持ちいい』、これしかない。

「え……ちよ、なんで、いったいどうして……」

「ほら、じつとしてなきゃ。ブラをつけるときは、外側から内側に膨らみを寄せて、カップの中にまとめないと型崩れするんだから」

この膨らみとか、まとめるとか、そんなことが必要なものだとは思ったことはない。

実際、同級生のそれに比べても、一希の胸は控えめ……というか、お椀型とかマッシュマロなんていう比喻表現が必要な大きさじゃないはずだし、今の自分の身体を見ても印象は変わらない。

……けど、無きに等しいその器官は、確かにここにある。

それは、大きさ云々の問題ではなく、触れられただけで蕩けてしまうような感覚が照明していた。

「っ……く……！ ま、待ってよ。もう少し優しく触ってっば」

慌てて、抗議の声を上げてみる。けど……。

「なーに言ってるかな。十分優しくしてるし、こうしないと胸に変な跡つくんだから」

わたしの後ろに立った男の子は、手の力を緩めようとはしてくれない。僅かな膨らみが、そしてしつとりとしたカスタードのような甘い痺れが、彼の指によって外側から内側へと揉み込まれていく。

……多分、これ、男の子で言ったら、皮の上からおちんちんを撫でられているくらい。

ちりちり、ぴりぴり。気持ちいい電気が、止まらなくて。

「ん、これくらいかな」

ようやく開放された時は、立っているのがやつとのくらい。

背筋に回った痺れは、ちよつとやそうつとじゃ収まりそうにないくらい。

「じゃ、次はパンツだよね」

「ふえ……？ や、ちよ、ま、待……！ あ、あうううう！」

容赦なく、脱がされる。

なんでだろう。顔に火がつくくらい、心が消え入りそうなくらい、恥ずかしい。

対して樹は、堂々と下着を選んで、わたしに見せびらかしてきた。

「ん、このブラに合うのは、こっちのかな」

「え……？ なにそれ、ちっさい布……」

「うるさいな。ちゃんと伸びるし、パンツっていったらこれくらいがフツーなの」

「……わたし、さっきのほうがいいな。ブリーフみたいで、安心感あるし」

「だーからー、それだと万が一見えちゃった時に問題あるって言ったっしょ？ いいから履け、さっさと着替える！」

「や、やー……っ！」

くるぶし、膝裏、そして太もも。

あの小さな生地が、びっちりとした薄っぺらい布が、樹の手によってわたしの身体を通ってきて……。

「ひ……ッ？ く、ふ、ふあ……？」

そして、重なった。

多分、女の子の、一番大事な場所に。

変な声が出た。僕が每晚想像していた一希が、オナニーのはじめの頃に出すような声。

当たり前前だ。女の子の下着が、いやらしい場所に食い込んでるんだから。

「あ、う……だ、だめ……やっぱり、こんなの恥ずかしすぎる……」

これは、女の子の体内にいる『僕』の本音。

けど、ちよっぴり嘘も混じっている。

だって、恥ずかしいけど、むずむずする。

さっきの痺れが、今度はぴりりと腰の周りに回ってきたんだから。

……そんなわたしを見て、樹はやれやれと溜め息。

「……今更だけどさ。女の子って、恥ずかしいものなんだよ」

「え？ あ、あう、昨日まで女の子だった一希がそれ言うの？」

「だから、今更つつつてるっしょ。けど、なっちゃったもんはしようがないんだからさ」

ただでさえ困惑して、しかも気持ちいいなんて感じちやってるわたしに比べて、僕の身体の中の一希は怖いくらいに冷静だ。

「さ、この調子で制服着るよ。大丈夫、ブラに比べたら恥ずかしくないから」

「え……えええ……っ！？」

（中略）

何とか冷静になりたくて、今日一日のことを頭の中で整理しようと考えてを巡らせる。

フェデリカが言ったこと。この部屋に入り込んできた樹。

醒める気配が全くない夢。これは、本当に夢なんだろうか。

それに、この身体。あんなに恥ずかしい下着をつけた女の子が、本当に今の僕の姿なんだろうか。

ブラウスの下に隠れているものは、胴体をぐるっと回るカップ付きの胸当て。

ショーツパンツの下には、見るだけでほっぺたが赤くなりそうな、小さなパンツ。

女の子なら、当たり前前のようにつけているもの。



けど、その両方が、昼間中ずっと『一希』の羞恥心を煽ってきた。だって、歩くだけで胸の先っぽがブラに当たって、パンツはお股をきゅ、きゅっと締め付けてくるんだから。

……だから、今なら少し、共感できることがある。いや、実際にこの身体で味わったからこそ、理解できたと言っているのかも。

——女の子にも、性欲はあるんだ、って。女の子だって、オナニーするんだ、って。

だって、『女の子になったこと』以外で、今日一番びっくりしたことは、樹に下着をつけられた時の、あの感触なんだから。

自分に、胸を触られた。男の人に、パンツを履かされた。ともすれば羞恥プレイとなってしまうような、倒錯的な場面。

その時に感じた、微かな痺れが……まだ、身体の中にくすぶっている。こんなことは、男の子だとあり得ない。勃起したものはいつか収まるものだし、おちんちんが大きくなったまま戻らないってなったら、それは性的に興奮したもののじゃなくて、単なる病気だ。

……けど、女の子の場合。一度、くすぶった性欲は、男の子と別の意味で『溜まる』んだ。

「……一希……月に、二、三回は……するって、言ってたよね」  
……冷静に、努めて冷静に。そう考えようとしていたはず。けど、だめだ。

一度思い起こしてしまった『痺れ』は、さもそれが自然であるかのようになり、『わたし』の指を優しく動かしていく。

——そう、服の上から、ほんのりとした胸の膨らみに。  
「……ッ！ はう……！！」

二度目の、驚き。ブラウスに手のひらを這わせただけで、おちんちんを撫でた時みたいな衝撃が脳みそにびりびりと響いてきた。

これが、女の子の身体。これが、一希がいつもしているオナニー。……うん、違う。こんなの、オナニーで言ったらまだ入り口の入り口に過ぎない。

けど、どうしたら。この疼きを収めるには、この華奢な身体を、自分でどう触ったらいいんだろう。

その時、だった。それは、頭の中に直接響くような、あるいは幻聴かもしれない、女の

人の声。

『大丈夫。難しく考えなくてイイカラ』

……キミは、サキュバス？ 僕にこんな夢を見せている張本人？

『そう。ちょこっとビターでスイートなはじめの一人えっち、見せてもらいにきたノ。大丈夫、いつも想像していたミタイに、えっちしてみればいいんだヨ？』

幻聴は、女の子初心者な僕に、優しくそうアドバイスしてくれて……。

「……あ……ボタン、簡単に外れるんだ」

ブラウスの第三ボタンが、ぽっ、と音を立てる。

隙間から覗いたのは、さらりとしたきめ細やかな、一希の肌。

……ぽっ、ぽっ、ぽっ。

その手が、他のボタンにも手をかけていく。

しばらくして、小さな膨らみのブラジャーが、露わになった。

「……すべすべ、なんだよね……女の子の肌って……」

お腹や腰周りの曲線とか、ブラの紐とか。そんな場所に、細い指がちょこちょこ触れていく。

……くすぐりたい。けど、こんなことまで気持ちがいい。

だってこうすると、身体の隅々にまで痺れが広がっていくんだから。けど、次。

恥ずかしいけど、でも興味があるから、『わたし』の手がブラのホックにかかると。

程なくして、胴体を締め付けていた拘束が、今日始めて緩んでいく。

「……あ……」

感じたのは、開放感。

それと共に、わたしの目に飛び込んできたのは、丸いぽっちの桜色の乳首。

……上、向いてる。物欲しそうに、触って欲しそうに、とがってる。

よし、やってみよう。夢の中で、一希はこうやってるから。

そのぽっちを挟み込むようにして、おっぱいを包み込む。

「……ッ！ ふあ、あんっ！」

……包み込めるほどの膨らみなんてないけど、でも、比喻表現だとしたら、それが正しいと思う。

柔らかくて、ふんわりしてて。なのに先端は硬くて、こりこりとした感触。

これ、絶対気持ちいい。快感の量で言ったら、僕が自分のおちんちんを扱ってる時と同じくらい。

それが、今はおっぱいだけで感じてる。

「……女の子の身体って、凄いな……！  
「は、はあ、はあ、んんん……っ！ も、もつとえっちに……しても、  
いいよね……」

繰り返り広げられているのは、一希のオナニーシーン。  
今までは、想像の中でしかなかったこと。けど、ここでは自分自身の  
感覚として、身体中に細かな電気が走ってくる。

だから、指が動く。妄想通りに、ううん、それ以上に。  
くりくり、こりこり。乳首をくすぐったり、時々ぎゅっと潰してみた  
り。

Aカップか、それ以下の盛り上がりをも、白の中のお餅みたいに捏ねて  
みたり。

そして、指を健気に押し返してくる弾力を、自分自身で楽しんでみた  
りもして。

「くふ、ふう、ふああ……！ 気持ち、いい……おっぱい気持ちいいよ、  
一希……！」

今の僕は、ううん、わたしは、冷静に『どうしようもない』と判断し  
てしまっている。

こんなの、抑えようとしても無理。だって、一度触りはじめたら、後  
はどんどん痺れが広がっていくだけなんだから。

当然、頭の中もぐるぐるで、ほわんとしてて。  
こんな状態で、我慢なんてできっこない。

「はあ、はあ……いい、いいよね、ここまで来たんだし……」  
ベッドの上で、身悶えていたわたし。当然、制服も乱れて、スカート  
がめくれている。

……その中に見え隠れしていた、ショートパンツ。  
それを脱ぐのは恥ずかしいけど、今はそれより興味の方が勝ってるか  
ら。

「……そう、だよ……着たままだと、蒸れちゃうんだから……」  
誰に、聞こえるわけでもない。聞かせるわけでもない。

けど、そんな言い訳じみた独り言を免罪符にして、わたしはショート  
パンツをゆつくりと脱ぎ捨てていく。

「……？ うあ……なに、これ……えっちな、匂い……」  
多分、これが女の子の香り。

ほんの少しだけど、あんなに小さいパンツの真ん中から、ツンとした  
甘酸っぱいものが漂ってくる。

……濡れている。  
女の子の大事な部分が、一希のあそこが、濡れてるんだ。



「——ううん、そうじゃない。濡らしたのはわたし。えっちな気分にな  
ってるのもわたし。」

こんなになるまで、オナニーしてるのは、誰でもないわたしだ。

「……ここ……今は、わたしのおまんこ……なん、だよね……自分のカ  
ラダだし、どんなにしても、いい……んだよね」

ちよつとした感動と、抑えきれない衝動。

そして、二種類の背徳感。

一つめは、女の子であるわたしが、学校から帰って来るなりベッドに  
身を埋めてオナニーしてること。

もう一つは、僕がこんなことをしてること。

けど、後者のそれは、意識の中で急激に薄まっていく。

……一希、ごめん。僕、もう我慢できない。

だって、胸だけでこんなになってるんだから。ここを触れば、女の子  
の芯を触れば、もつと気持ちよくなれるはずなんだから……！

「そつと……そおつと……ッ？ ひ、ふひゃあああッ！」

ぬちゆり、という卑猥な音が、自分の身体から発せられる。

それは、男の身体からは出るはずのない、ぬめりと湿り気を含んだ音。

「は……つく、ん、んんんうっ！」

とっさに、制服のリボンを噛んだ。

いくらなんでも、今の声は大きすぎる。そして、えっちというより、淫らだ。

「ふー、ふー…ん、んう…っ、くふ、ふむうう…！」

喉を震わせるのは、身体の奥からくる感覚。

男の時に、射精欲がせり上がってくる感じとは質も量も全く違う。

量で言えば、本当に十倍。太ももの内側の、スリットになっている部分に触れた瞬間、精液が飛び出た時くらいの気持ちよさが背筋を貫いた。

そしてその質は、男の子が『出した』なら、女の子は『中に広がる』ようなもの。お腹の内側に気持ちいい痺れが溜まって行って、更にそれが細かく弾けていく。

「くふあ…っ！ ひ、ひあ、つぶ、んぐむう…っ！ ふあ、んあ、ん、ん、んんんっ！」

必死にリボンを噛み、声を押し殺す。

一つ一つの快楽が、絶頂みたいなもの。本来の僕なら、とっくにいつて、果ててるに違いない。

…けど、指が動く。何故なら、まだその入り口に触れただけだから。女の子には、もっともっと気持ちいい場所があるはずだから。

パンツをずらして、ぬめる触感を確かめたのが、多分大陰唇。

バラの花びらの奥の方みたいな、複雑な肉の壁。きつとここが、小陰唇。

新しい場所に指が這っていくと、くちくちといった水音がいつの間にかぬちぬちになって、更にぬちゅ、ぐちゅと泡立つようになっていく。

「あ、ふ…んう…っ！ はあ、はあ…っ…触るよ…っ…触る、からね…！」

そして、目的の場所。

ひだひだの上にあるそこは、知識でしか知らない、女の子が一番感じる場所。

「ひ…っ！ きゃう、ん、んあ、あはあああああ…っ！」

…わたしが、今、皮を剥いちやっただ。

まるで、男の人のその、ミニチュアみたいなサイズ。小さな豆粒を形だけ守っていた薄い肉の皮を、えっちなおつゆの力を借りて、つるんと剥いちやっただ。

「はー、はー、ひふ、ふふあふ…っ…ここ…っ…だよね、クリトリス、ここだよね…っ…すごい、すごい…っ…っ、今の何百ボルトかな、何千ボルトかな…っ…」

その衝撃は、まるで五寸釘で刺されたかのよう。

けど、感覚自体は甘く蕩ける蜂蜜のよう。

だから、また新しい気持ちよさが、お腹の奥に広がっていく。



けど、今はそんな気になれない。というか、そんな余力はどこにもない。

「は……ふ……ふぁあ……すご、い……すご、かつたあ……」  
うわごとのように、そう言うのが精一杯。

何もかもが上の空で、ぐったりとベッドに四肢を投げ出して。いつまで経っても収まらない、腰の細かな痙攣を感じながら。

……わたしは、いった後の余韻を、純粹に愉しんでいた。  
そう、愉しんでいたんだ……。

『……くすっ、どう？ 女の子のカラダ、気持ちいいデショ？』

……うん、気持ちいい。

『デモ、今日はここでオシマイ。メインディッシュは、まだ準備できてないノ』

おしまい……？ どうして……？

『そう。夢はオシマイ。ふふふっ、意地悪カナ？ しっくりきてるカラダから、ココロを引き剥がしちゃうのツテ』

……カラダ、ココロ。

わからない。それは、わたしのこと？ 僕のこと？

『それを決めるのは、イツキ。くすくすくすっ、結果は見えてるけどネ』

『あまりいいスイーツは、いつでもどこでも別腹。一度知ったら、もつともっと欲しくなるんだカラ……』

内気な男の子が気になる幼馴染みと  
Hできる方法をTS的に考えてみた

## 内気な男の子が気になる幼馴染みと Hできる方法をTS的に考えてみた

体験版はここまでです。

続きは頒布版にてお楽しみいただけます。

**※注意**

なお、体験版は1章部分のすべてをカット、その他部分についても一部カットしております。